

子供が、指導者を育てる

——作文の中に、心の声を読む——

公益財団法人育てる会 会長 青木孝安

正月休み中、親元を離れて山村で暮らす子供（山村留学生）たちの作文に目を通した。いつも感じるのだが、山村留学生の書く文章には、心をひきつける表現が多いし、また、これからの指導への示唆を得ることも多い。心に残る表現箇所を抜き書きして、解説を試みたい。

小学3年

「つらいとき、周りのお姉さんやお兄さんたちが、「大丈夫だよ、泣かないでね」となぐさめてくれた。本当にあたたかな言葉だった。私も「がんばらなくっちゃ」という気持ちかわいてきた。

小学6年生

「食事マナーについて、多くのしてきがあった。水をのむ時の音だ。メンバーに注意

され泣いたときもあった。でも、今は、「注意してくれてありがとう、みんな」と言いたい。

農家生活では、異年齢の子ども数人で、仮の兄弟関係を構成させ、生活させている。この中で、教え合い、学び合い、思いやりの心を養う効果は大きい。これぞ縦割り年齢での集団生活の賜物と思つ。

中学1年

「僕はある目標を立てた。僕は自然と触れ合う時間を大切に作る日々を送った。通学路、朝の集いで植物の話が出れば、山の中に入り、目を凝らして探した。見つければ観察したり、食べてみたりした。あまりマイペース過ぎてみんなに置いてきぼりにされたりした。だが、マイペースを常に保ちながら、動植物を探し回った。ある日、通学路で、ガサットと葉のけられる音と共に、道に狸が飛び出してきた。

日々を充実させて、笑顔で修園を迎えたい。

中学2年

「きれいー」

バスの中で声が聞こえた。眼い目を開いて窓の外を見ると、雪に覆われた白く輝く山並みの隙間を朱色の太陽の光が照らし、まさに心奪われた一瞬だ。あの時の感動は忘れようがないほど大きかった。他にも、八坂美麻の四季が見せてくれる一瞬は、脈々と受

け継がれてきた自然の命を感じる。そんな自然の中で生活ができて、本当に幸せだ。

まず、中学1年生の文章についてである。

かつて、ある著名なナチュラリストが、われわれ人間は、動物園で見た動物は忘れることが多いが、自然の中で遭遇した動物との体験は、生涯忘れないものだ、と解説したことを記憶しているが、この子供の、草むらから飛び出した狸との体験は、まさにそのことを言っていると思う。

また、この子供の自然へ寄せる興味、関心の動機が、朝の集いで、短時間ではあるが、自然についての話をする指導者たちの努力が役立っていることを知り、嬉しく思う。

つぎは、中学2年生の文章についてである。

朱色に輝く白い山並みの美しさは生涯忘れられない、と書いている。確かに、この子供は、この体験を生涯忘れないであろう。

この文章を読んで、50年ほど前のこと、子供時代、夕日が沈む美しさに感動した体験を、我が子にも与えたいと願って、山村留学をさせるのだ、と語った。一母親のことを思い出した。

二人の子供の体験は、その子供にとっての、自然と触れ合った、原体験と言えるものである。

中学2年

母に紹介してもらった山村留学の記事を読み、私は直感で、「これだ」と思った。そんなことがきっかけで山村留学へ来た。……

一日一日が、私を大きく成長させてくれた。食に対する考えが変わった。採れたてのものが入っている食事の食材が身近に感じるようになった。学園生という時間がとても温かい幸せな時間だった。休日、外でのびのびしたり、食堂でくだらない話をする時間が、私にとって最高に幸せの時間だった。

私はこの山村留学で感じ、学んだことを、一生の宝物にしたい。きっと、ここで体験したことは、いつか、壁にぶつかった時の踏み台になると思う。今、この幸せを噛みしめて、一瞬一瞬を大事にしていきたい。

この文章を読み終わった後、「そう、よかったね」とひとり呟いた。これ以上、何も言うことはないと思った。私は、この文章から、幸せをもらったよつな気がした。

中学2年生は青年期の入口、心の内なる世界が広がる時代、抽象的表現が豊かになる。天氣のいい日の静かな午後、この子供に問い、ききたいものだ。

「身近かな食材とは、何」「くだらないとは、何」「幸せとは、何」など、是非、教えてくれないか、と問いたい。笑顔で頷いて聞き続けたいと思った。

子供たちの、どの作文も、心にしみるものはかりだ。そこには、ありのままの心の声があるからだ。その声に耳を傾けることにより、指導者が育てられるのだと実感した正月の一日であった。